

集団下痢症患者および生食用鶏肉から分離された *Escherichia albertii* の性状解析

保健科学課 松田 正法・麻生嶋 七美
重村 久美子・徳島 智子
本田 己喜子・吉田 英弘
動物園 樋脇 弘

第 34 回日本食品微生物学会学術総会

Escherichia albertii は下痢原性をもつ新種の細菌として注目されている。福岡市において過去に腸管病原性大腸菌集団下痢症として処理されていた事例に *E. albertii* が含まれていなかったかどうかの遡り調査を行った。また、2013 年 3 月に市販生食用鶏肉から検出された本菌の性状解析についても併せて報告する。

福岡市で発生した *eae* 遺伝子保有大腸菌様細菌による集団下痢症 2 事例(2003 年および 2005 年発生)由来 18 株を試験に供したところ、すべて *E. albertii* と再同定された。これら 18 株および生食用鶏肉由来の 1 株、計 19 株の薬剤感受性試験では、8 株 (42.1%, すべて 2005 年発生事例由来株) が CET 耐性であった。糖分解試験については、19 株中 6 株 (31.6%, すべて 2003 年発生事例由来株) がソルビトール非分解であった。PFGE 解析では、生食用鶏肉由来株、集団下痢症 2 事例がそれぞれ異なるパターンを示した。